

「いのちを実感し親になることを考える体験学習」プロジェクト（Ⅲ）
事業実施報告書

2007 年 12 月 28 日提出

神戸大学大学院人間発達環境学研究科
ヒューマンコミュニティ創成研究センター子ども家庭支援部門 伊藤 篤

1. はじめに

2005 年度および 2006 年度に引き続いて、神戸大学大学院人間発達環境学研究科・ヒューマンコミュニティ創成研究センター・子ども家庭支援部門は神戸市から業務委託を受け、「いのちを実感し親になることを考える体験学習（Ⅲ）」プロジェクトを実施した。本報告書では、この 3 年目のプロジェクトの実施概要のみを掲載する。事業の効果等にかかわる評価部分に関しては、本報告書とは別に、「いのちを実感し親になることを考える体験学習プロジェクト（Ⅰ）～（Ⅲ）事業評価報告書」として、2008 年 3 月末日に改めて神戸市に提出する予定である。

2. 本プロジェクトの概要

<目的>

「中学生が長期的・継続的に赤ちゃんとふれあう」ことが本プロジェクトの形態上の目的であった。参考にしたのは、カナダでおこなわれてきた「ルーツ・オブ・エンパシー」という青少年の共感性を高める実践であった。このプログラムは、半年以上にもわたり、同じ赤ちゃんと親をひと月に 1 回ずつ（年に 9 回 1 回ごとに「ふれあいのセッション」をはさんだ「事前学習」と「事後学習」がセットになっている）学校に招き、青少年が赤ちゃんの成長を実感しながら「命の尊厳」や「養護性」を学ぶことを通して、「暴力を抑制し共感性を高める」という短期的目標と「将来の親になるためのレディネスを育む」という長期的目標を同時に達成することをねらいとしている。この方法にしたがい、2007 年 5 月から同年 12 月まで毎月第 2 土曜日・計 7 回、中学生を対象とした「ふれあい体験学習」を

おこなった（内容の詳細は後述する）。このプロジェクトの内容上の目的は、ふれあいという実体験を通して「赤ちゃんの成長過程を理解する」とともに「自分の親・家族に対する肯定的な態度・自分が親になることに対する肯定的な態度を身につける」ことであった。また、共感性が7回の「ふれあい体験学習」によって高められるかどうかにも焦点をあてた。これらの目的が達成されたかどうかを検討するために、ふれあい体験学習の参加者を対象とした体験直前（プレテスト）と体験直後（8 か月後のポストテスト）の調査データを縦断的に比較した。さらに、ふれあいを体験しない中学生（対照群）との比較もおこなった。これらの評価結果に関しては本報告書では割愛し、別の報告書において詳述する。

＜プロジェクト対象者のリクルーティング＞

対象者（＝学習者）は中学生とした。これは、長期的・継続的ふれあい体験学習が小学生に対しては一定の効果をもつことが2006年度に実証されたため、同様のふれあい体験学習がさらに年齢の高い思春期の青年にも効果をもつのかどうかを確認したかったためである。昨年度（2006年度）のプロジェクト報告書の短縮版と赤ちゃんふれあい体験をしてみたい中学生を募集するチラシ・参加申込書を作成し、神戸市灘区保健福祉部の協力を経て、2007年4月中旬に灘区内の中学校長連絡会で、それらを配布した。「ふれあい体験学習」が子どもにとって意味のある学習機会であり、体験の効果が期待できることを報告書にもとづいて説明し、各学校で関心のある生徒に声をかけて募集・推薦してほしい旨を依頼した。また、募集のチラシ・参加申込書は、同市灘区保健福祉部の協力を経て、灘区内の私立中学校にも配布された。2007年4月末日を第1次締め切り（5月末日を第2次締め切り）とし、参加申込書を学校からファックスまたは郵送で「のびやかスペース あーち」に提出するという手続きをとった。参加申し込みは4校（公立2校・私立2校）からあり、すべて女子生徒であった。その内訳は以下のようなものである。5月開始当初は、1年生4名・2年生3名・3年生2名（計9名）であった。追加募集をおこなった結果、6月以降は、1年生6名・2年生8名・3年生2名（計16名）となった。ただし、7月以降に部活動等の理由で途中から辞退するケースが4名、3年生が新たに10月より1名参加するなど、参加者の合計は月ごとに変動した。

<プロジェクト協力者のリクルーティング>

協力者は、自分の赤ちゃんを小学生とふれあわせてもよいと考える神戸市灘区内に在住する父母であった。灘区保健福祉部から、2006年12月生まれの赤ちゃんをもつ家庭に、「0歳児のパパママセミナー（月齢に応じた養育のありかたを学ぶセミナー）」の受講を勧誘し、同時に「赤ちゃんふれあい体験」への協力を求める案内文を2007年3月末日に発送した。同区の乳児4か月健診の案内と一緒に同封した場合と案内文のみ送付した場合とがあった。2007年4月末日を締め切りとし、参加申込書を自宅からファックスまたは郵送で「のびやかスペース あーち」に提出するという手続きをとった。参加を申し込んだ親子は17組（内 双子が1組）であった。

<感染症対策>

中学生が赤ちゃんとふれあうときに留意すべき点のひとつは、中学生から赤ちゃんにさまざまな病気が感染するのを予防することである。本プロジェクト開始直前から（2007年4月末～）、参加を申し込んだ中学生の家庭に「お子様の予防接種暦などに関するおたずね」と題した調査票を郵送し、保護者に必要事項を記入して返送するように求めた。調査の内容は「これまで子どもが受けた予防接種を選択肢（BCG・三種混合・麻疹・風疹・ポリオ・日本脳炎・水痘・おたふくかぜ・その他）から選ぶ」と「これまで子どもが自然にかかった病気を選択肢（麻疹・風疹・水痘・おたふくかぜ・その他）から選ぶ」ものであった。回答の組み合わせから、それ以後に特定の疾患に感染する可能性のある子どもを同定し、その保護者に対して「周囲に当該の罹患者がいる場合と本人がその疾患に感染した恐れがある場合は、『ふれあい体験学習』に出席しないよう」に依頼した。

<プロジェクトの内容>

すでに述べたように、このプロジェクトは2007年5月から同年12月までにわたる（毎月1回、8月を除く計7回）長期プログラムである。「赤ちゃんふれあい体験学習」は、月齢にあわせた赤ちゃんの特徴を学ぶ「事前セッション」・実際に赤ちゃん和交流する「ふれあいセッション」・学んだことの整理をおこなう「事後（振り返り）セッション」で構成されていた。「0歳児のパパママセミナー」は、0歳児の父母が赤ちゃんの月齢に応じた親としての養育のありかたを学ぶ「セミナーセッション」・自分の子ども（0歳児）と一緒に小学生と交流する「ふれあいセッション」・アンケートに回答をする「アンケートセッション」

で構成されていた。「ふれあい」は、赤ちゃんが生後5か月から開始され、生後12か月で終了した。ここでは、本委託事業に関連する「赤ちゃんふれあい体験学習」と「0歳児のパパママセミナー」の各7回分のテーマと主な内容を以下にまとめる。

赤ちゃんふれあい体験のテーマと内容

第1回（生後5か月時）5月12日（土）10：30～12：00

誕生から半年間の赤ちゃんの発達：プレテスト+妊娠中の胎児の様子、出生直後の新生児の様子、半年間の発達の様子を講師が説明+赤ちゃん人形（新生児の平均的な体重・身長と同じ）男・女2体を順次抱いて、ふれあいの予行練習（ふれあい方の留意事項も説明）⇒学習シート記入⇒ふれあい体験⇒学習シートへの記入（振り返り）

第2回（生後6か月時）6月9日（土）10：30～12：00

赤ちゃんが示す繰り返し行動の意味：生後1か月までの反射行動の反復、1か月～4か月における反射行動の工夫・変化とその反復、4か月以降における自分が引き起こす外界の変化を意識した反復行為といった発達的变化を講師が説明⇒学習シート記入⇒ふれあい体験⇒学習シートへの記入（振り返り）

第3回（生後7か月時）7月14日（土）10：30～12：00

姿勢の変化と世界（視野）の広がり：「寝返り」から「おすわり」の時期までの姿勢の変化が赤ちゃんの「視界・視野」の変化、手指の巧緻性の高まり、「意志（モノが欲しい・モノを取りたい）」の高まりにつながることを講師が説明（大学生が実際に姿勢を変化させて実演した）⇒学習シート記入⇒ふれあい体験⇒学習シートへの記入（振り返り）

第4回（生後9か月時）9月8日（土）10：30～12：00

赤ちゃんの科学性：対象の永続性を中心に、生後9か月の奇跡とよばれる赤ちゃんの認知面での大きな変化（手段-目標関係の理解、出来事の予測、3項的相互交渉など）を講師が説明し、ふれあいのときに簡単にできる「永続性に関する実験」の予行演習⇒学習シート記入⇒ふれあい体験⇒学習シートへの記入（振り返り）

第5回（生後10か月時）10月13日（土）10：30～12：00

赤ちゃんの好奇心と探究心：基本的には「第3回」の内容を発展させたもの。「はいはい」から「つかまり立ち」への変化が「好奇心・探究心」を高めることを講師が説明し、「あーち」利用の親子の協力してもらい、中学生が「はいはいの姿勢の発達」を見学さらに、ふれあいのときに簡単にできる「つかまり立ちを利用した実験」の予行演習⇒学習

シート記入⇒ふれあい体験⇒学習シートへの記入（振り返り）

第6回（生後11か月時）11月10日（土）10：30～12：00

言葉とコミュニケーション：生後すぐの「泣き」から「クーイング」「喃語」「リーチング」「ポインティング」などを経て生後1年頃の「初語」に至る言語およびコミュニケーションの発達段階を講師が解説⇒学習シート記入⇒ふれあい体験⇒学習シートへの記入（振り返り）＋誕生会（最終回で親子に渡す文集）に向けて手紙を書く作業

第7回（生後12か月時）12月8日（土）10：30～12：00

お誕生日おめでとう：文集の飾りつけ作業⇒学習シート記入⇒ふれあい体験（ジュースとクッキーを楽しみながら、文集のプレゼント、写真撮影、手遊び、誕生会の歌（中学生のピアノ演奏に合わせて計5回）→学習シートへの記入（振り返り）＋**ポストテスト**

0歳児のパパママセミナーのテーマと内容

第1回（生後5か月時）5月12日（土）10：30～12：00

赤ちゃんの生活空間と心身の発達：親が生活のリズムを赤ちゃんに合わせることの重要性、授乳や睡眠のパターンについての個人差や姿勢と感情や運動との関係を理解したうえで、それらに応じた働きかけの大切さを講師が説明したあと、質疑応答⇒ふれあい⇒アンケートへの回答

第2回（生後6か月時）6月9日（土）10：30～12：00

視界の広がり - うつぶせになって遊ぶ -：視線の変化と遊びの広がり、赤ちゃんを一人にしないで十分に遊び込むことの重要性、遊びにとってのおもちゃの意味を講師が説明したあと、質疑応答⇒ふれあい⇒アンケートへの回答

第3回（生後7か月時）7月14日（土）10：30～12：00

人見知り・場所見知り：赤ちゃんがなぜ不安を感じるのか、赤ちゃんにとっての「新しい場所」の意味となじむためのポイント、友だちとの出会いの意味を講師が説明したあと、質疑応答⇒ふれあい⇒アンケートへの回答

第4回（生後9か月時）9月8日（土）10：30～12：00

後追い - 目の前のこと 向こう側のこと -：赤ちゃんが親を後追いすることをポジティブにとらえることの重要性、隠されたものを探そうとすることの発達の意義、三項関係（自分・親・対象）の発達の意義を講師が説明したあと、質疑応答⇒ふれあい⇒アンケートへの回答

第5回（生後10か月時）10月13日（土）10：30～12：00

赤ちゃんの好奇心と探究心：乳児期の第3段階に移行し、手指の発達が道具やモノへの関心を高めたり、言葉の理解の発達が感情の分化を促進したりすることが、赤ちゃんの意思表示すなわち好奇心・探究心につながることで、そして、この好奇心や探究心の充足を、遊びを通して見守ることが親の大切な役割であることを、講師が説明したあと、質疑応答⇒ふれあい⇒アンケートへの回答

第6回（生後11か月時）11月10日（土）10：30～12：00

遊びの広がり（幼児期の生活に向けての内容も含む）：メディア（テレビやビデオ）とのかわり方、この時期に意味のあるおもちゃの要素、移動するようになった赤ちゃんの安全確保のポイントを講師が説明したあと、質疑応答⇒ふれあい⇒アンケートへの回答

第7回（生後12か月時）12月8日（土）10：30～12：00

幼児期の生活に向けて：赤ちゃん時代が終わり、幼児期に入ると「歩く」「話す」「考える」といった力が伸びる時期であり、それらを十分に保障するためには、個人差を理解したうえで、「手を出しすぎない」「放っておきすぎない」「指示しすぎない」「子どもの求めにきちんと応じる」といった姿勢が重要であること、1歳代は基本的には「子ども自身がやりたいと思っていることをやらせる」時期であることを講師が説明⇒ふれあい（ジュースとクッキーを楽しみながら、文集のプレゼント受け取り、写真撮影、手遊び、誕生会の歌（中学生のピアノ演奏に合わせて計5回）⇒アンケートへの回答

<プロジェクトの参画者と役割>

このプロジェクトは以下の組織や個人による連携によって実践された。神戸市灘区保健福祉部（子育て支援担当・主幹）は、学習対象者である中学生の募集に関して当部門と灘区内の中学校長会をつなぐ役割と、協力者である0歳児とその父母への募集案内を発送する役割を受け持った。「赤ちゃんふれあい体験学習」の「事前セッション」と「事後（振り返り）セッション」は筆者（6回分）当部門の教育研究補佐員で助産師免許保持者（1回分）が担当した。「0歳児のパパママセミナー」の講師は、当部門研究協力員と元幼稚園教諭（7回分）が担当した。この2名は、「ふれあいセッション」と父母がアンケートに回答をする「アンケートセッション」も担当した。また、上記の教育研究補佐員が、「中学生の赤ちゃんふれあい体験学習」と「0歳児のパパママセミナー」の双方全体をコーディネートした。

＜プロジェクトの測度（データ）＞

本プロジェクトで収集したデータは、「1回～7回を通した中学生の出席率および0歳児とパパ・ママの出席率」「1回～7回を通して小学生が記入した学習シートおよび父親・母親が記入したアンケートの内容」「小学生が1回目と7回目に記入したプレテストとポストテスト（上記、赤ちゃんふれあい体験学習のテーマと内容にある□で囲んだ部分）」と「中学生の保護者に対するアンケート（後日郵送で調査する予定）」である。以下では、「ふれあい体験学習」と「0歳児のパパママセミナー」の各回の出席率とその推移を紹介し、考察をおこなう。他の評価結果に関しては、すでに述べたように「いのちを実感し親になることを考える体験学習プロジェクト（Ⅰ）～（Ⅲ）事業評価報告書」として改めて報告書を提出する予定である。

3. 本プロジェクトにおける参加者の出席率とその推移

＜中学生の赤ちゃんふれあい体験学習について＞

このプロジェクトを計画したときから、中学生は学校のクラブ活動等で休日でも多忙であり、毎月1回（第2土曜日）・7回のセミナーへの参加者が非常に少ないと予測された。事実、2007年4月末日の第1次締め切り時点における参加希望者は9名に過ぎなかった。そこで、神戸市灘区保健福祉部が、さらに灘区内にある複数の私立中学校に積極的に広報した結果、6月以降は16名と増加した。このように、プロジェクト参加者である中学生の総計は月ごとに変動していた。そこで、各月の参加者合計数を母数として、1回目（2006年5月）から7回目（2006年12月）までの出席率（出席者数）を算出したところ、以下のよう結果を得た。

1回目（2007年5月）	100.0%	（出席者9名	母数9名）
2回目（2007年6月）	81.3%	（出席者13名	母数16名）
3回目（2007年7月）	83.3%	（出席者10名	母数12名）
4回目（2007年9月）	50.0%	（出席者6名	母数12名）
5回目（2007年10月）	76.9%	（出席者10名	母数13名）
6回目（2007年11月）	84.6%	（出席者11名	母数13名）
7回目（2007年12月）	69.2%	（出席者9名	母数13名）

*なお、12月出席者のうち1名は事情があつて早退したため、ポストテストを受けていない。

7 回中 4 回は 80% を越える出席率であったが、残りの 3 回はそれほど高い出席率とはいえない結果となった。特に夏休み明けの 9 月の出席率は 50% となっており、1 回ごとに案内を郵送するなどの工夫をすべきであったと考える。しかし、この体験学習に出席することが学校の行事や授業の一環ではなく、参加者にとって特段のインセンティブがあるわけでもないことを考慮すれば、このふれあい体験学習は、参加した中学生にとって一定の魅力をもったプログラムであったと判断できよう。

<0 歳児のパパママセミナーについて>

17 組の参加者のうち、1 組は双子であったため、0 歳児の総計は 18 名である。1 回目（2007 年 5 月）から 7 回目（2007 年 12 月）までの出席者数・出席率を、母親と父親とを別々に算出したところ、以下のような結果を得た。

1 回目（2007 年 5 月）	母親 13 名	76.5%	父親 3 名	17.6%
2 回目（2007 年 6 月）	母親 16 名	94.1%	父親 9 名	52.9%
3 回目（2007 年 7 月）	母親 9 名	52.9%	父親 5 名	29.4%
4 回目（2007 年 9 月）	母親 14 名	82.4%	父親 4 名	23.5%
5 回目（2007 年 10 月）	母親 11 名	64.7%	父親 6 名	35.3%
6 回目（2007 年 11 月）	母親 14 名	82.4%	父親 6 名	35.3%
7 回目（2007 年 12 月）	母親 13 名	76.5%	父親 7 名	41.2%

父親と赤ちゃんだけという組み合わせの出席は皆無であったので、母親の出席率が事実上は家族全体の出席率に相当する。母親（＝家族全体）の出席率は、50% 台から 90% 台と回によってばらつきがあるが、この理由は不明である。しかし、出席率が回を重ねるごとに減少しているわけではないことから、本セミナーの魅力（質）が一定の水準にあったことが推測できる。また、父親の参加率も約 20% から約 50% とばらつきが見られた。ここには記載していないが、出席データを詳細に見ると、同じ父親が繰り返し参加している。したがって、父親の参加を促進するためには、父親自身が一度でもセミナーに参加し、その雰囲気を実感することが必要条件であるといえよう。

本プロジェクトにかかわった組織および人々

神戸市灘区保健福祉部

神戸市灘区中学校長会（神戸市教育委員会）

神戸大学大学院人間発達環境学研究科・ヒューマンコミュニティ創成研究センター・子ども家庭支援部門

神戸大学大学院人間発達環境学研究科・ヒューマンコミュニティ創成研究センター・のびやかスペース あーち

宮木 昭（神戸市灘区保健福祉部・子育て支援担当・主幹）

川谷 和子（神戸大学ヒューマンコミュニティ創成研究センター研究協力員）

奥野 綾子（元幼稚園教諭）

その他 神戸大学大学院人間発達環境学研究科・院生、神戸大学発達科学部・学部生
および神戸女子大学・学部生のみなさん

中西美智子 佐原 和美 渡辺知津子（あーち職員）

寺村ゆかの（神戸大学大学院人間発達環境学研究科・教育研究補佐員・助産師）

伊藤 篤（神戸大学大学院人間発達環境学研究科発達支援論講座・教員）

謝辞・付記

赤ちゃんふれあい体験学習に参加した中学生の皆さんありがとう。また、協力いただいた赤ちゃんとお父さん・お母さんにも深く感謝します。このプロジェクトは、神戸市から「平成19年度 命の感動体験学習業務委託」助成を受けて実施されたものである。